

## Ⅱ 治療学級の指導について

石 黒 鈺 二

### 1. ま え が き

治療学級編成の目的と意義についてはすでに前のⅠ.において述べられているので改めて触れない。ただこの研究報告で問題としてとりあげたいのは、学業不振児の治療学級による指導が、社会的、情緒的原因の除去に特に有効であるとすればそれは一体どのような構造において、またどのような機能によってであるかを明かにすることである。

学業不振の社会的、情緒的原因の除去とは結局その根源的な要因である社会的安定性への要求や愛情への要求の不満を緩和あるいは解消せしめることでなければならない。従ってこのような要求不満の解消に役立つ集団構造とは学業不振児が成績優秀な成員からうける不当に強い抑圧が緩和され、その集団内において適当な社会的地位と役割を保持しうるようなものでなければならない。この場合その集団の成員間に不当な対立や拒否の関係が多く存在し、または発生しないように配慮しなければならないのは当然であろう。しかしこのことは、学業不振児がその中で社会的、情緒的に全く刺戟を感じないような集団を意味するものではない。むしろ不振児がそれに耐え、それに適当なしかたをもって反応しうる程度の適度の刺戟のあることは望ましいことである。

適度の刺戟とは外部の客観的事態にも関係するが、不振児自身の内部にある抵抗力すなわち外部刺戟に適応しうる能力の強弱にも関係する。教科の学習課題に対する認識構造が明瞭でないときには、課題追求の意欲が衰退する。学習成績—評点の不良はさらに自信を失わせる。しかし学業に関しては自我水準を無制限に低下させることを許さ

ない社会的、規範的な力が外から強い圧力として働きかけてくる。学年編制や年齢に相応する自己の体面の維持とか社会のそれに対応する地位や役割への期待などがそれである。従って学業不振児に対しては適当な刺戟のみが与えられるように統整された集団に所属させるというだけでなく、他面その集団における学習活動を通して、学習課題に対する認識構造の分節化、明瞭化が積極的に援助されなければならない。このようにしてはじめて学業不振児が自己の能力に対する自信をとりもどし、学習課題遂行に対する意欲を強化し、社会的安定感を回復することになるのである。

それではこのような目的に適合した治療集団がはたして構成できるだろうか。もしできたとしても、そこでここに想定したような機能が実際に働き、学業不振の事態が解消していくであろうか。この点を実証的に究明することがこの研究の主要なねらいである。

### 2. 治療学級の編成と指導効果

#### (1) 治療学級の編成

(a) 固有の学級の編成がえ —まず学業不振児の所属する学級（ホーム・ルーム）を治療に適した、不振児にとって安定した社会的関係が保てるような構造のものに編成がえをしようと考えた。このため学年始めに、知識・学力およびソーシオメトリを参照して編成がえをした。その結果をみると生徒の感想で“ひじょうによい、”とするもの4名、“だいたいよい、”とするもの32名、“よくもありわるくもある、”とするもの15名、“あまりよくない、”とするもの4名で、治療対象である6名についてみると、好ましくない友人結合関係を分離した例を除き、他はすべてこの編成がえに満足し

ている。

(b) 国語・数学・英語の学習における治療学級の編成—治療集団は、前述のように、その中で学業不振児が新しい社会的関係をつくりだす媒体となり、それを契機として学業不振の原因が除去または緩和されるような構造のものとしなければならない。このために前のI.で述べたような要領で、国語・数学・英語の授業の時に限り特別な治療学級を編成した。このようにして編成された治療学級の知能と学力を普通学級と比較してみると、表1のようである。これによってもわかるように、普通学級の下位者と治療学級の上位者の成績は互

圧迫感は軽減し、かつ指導上にも好都合となったものと解せられる。

(2) 指導の結果

(a) 治療学級の雰囲気—毎時間所定の観察記録に記入された学級の雰囲気の評定結果を総合すると表2でみられるように、国語・数学・英語ともに“学習にたいして終始熱心である”、“教師の質問や課題にたいして積極的である”、“学習の態度は一般に落ち着いている”、“明朗である”という項目で、また国語と数学では“学習が終りまでいきいきと続けられる”という項目でいずれも普通あるいは普通以上の良好な雰囲気を示している。なお国語

において“学習にあたって協力的”の項で5月から10月へいちじるしい進歩向上が認められるが、これはグループ学習をその指導にとり入れていたためと解せられる。

(b) 治療学級への態度—治療学級の編成にあたっては、前述のように生徒が十分納得した上で所属を決めたのであるが、実際に学習した結果この治療学級の指導に対して生徒がどう考えるようになったかを知るために金原勇氏<sup>(1)</sup>の用いた質問紙の形式に従って調査した。調査期日は7月19日と1月11日の2回である。まず治療学級と普通学級に分けた学習の仕方について賛否をみ

表1 両学級の知能と学力分布 (実数)

偏 差 値	組 別 検 査	数 学		国 語 と 英 語													
		普通組 (青組)		治療組 (黄組)		普 通 組 (赤組)				治 療 組 (白組)							
		知能	数学	知能	数学	知能	国語 I	国語 II	英語	知能	国語 I	国語 II	英語				
75 以上		11				3	18	8									
74 ~ 65		8	16	2		6	21	13	18	4	1	11	4				
64 ~ 55		18	6	5	12	17	9	2	8	6	13	7	9				
54 ~ 45		8	1	12	6	11	1	1		9	4	1	6				
44 以下					1								1				
最 高		74	82	72	64	74	78	86	77	72	65	69	69				
最 低		51	53	45	41	51	50	53	55	45	44	52	47				

註 知能検査は新田中B式、学力検査は国語Iが阪本一郎氏の国語学力診断テストで、他はすべて阪本一郎氏の教科別総合標準学力検査である。

いに交錯しているわけである。

なお両組を合わせてみても全般的に学力検査の成績が高いが標準偏差は次に示すように一般の学校と変りないので、集団力学的には一般の学校と同型の機制をもつものと考えられる。参考までに両組を合わせた平均(M)と標準偏差(S.D.)を示すと、知能(M=62.4, S.D.=6.8), 数学(M=64.3, S.D.=9.5), 国語I(M=64.1, S.D.=8.1), 国語II(M=65.1, S.D.=8.0), 英語(M=64.9, S.D.=8.4)である。治療学級ではこのような学力の個人差が、表1で明らかのように、著しく狭められたわけで不振児が上位者からうける過度の

と、表3のように7月の調査でも、1月の調査でも、“続けてやりたい”とするものが治療学級の大部分を占め、その意欲の程度も表4にみられるようになりに強いものが多くなっている。その理由をみると、表5のように“自分の力にあってよくわかる”とか“力が揃って勉強しやすい”などが多くあげられている。しかし7月の調査でこの学習に対して否定的なものが4名あった。それは治療対象である不振児ではなかったが、学級経営上看過できない問題である。そこでこれらについて反対の程度をみると、かなり強いのは2名であるが、その理由に“他の級の人がえらぶったり

II 治療学級の指導について

表 2 治療学級の教室の雰囲気

	教 科	数 学				国 語				英 語			
		5 月		10 月		5 月		10 月		5 月		10 月	
		D	S	D	S	H	F	H	F	N	G	N	G
1. 学習に対して終始熱心である ~熱心でない		1.2	0.7	0.9	0.8	0.6	0.5	0.8	0.8	0.5	0.4	0.4	0
2. 学習が終りまで生き生きと続けられる ~あきてくる		0.9	0.2	0.6	0.5	0.2	0.3	0.7	0.4	-0.1	0.2	0.2	-0.1
3. 学習の態度は一般に落ち着いている ~落ち着きがない		0.7	0.1	0.4	0.5	0.2	0.7	0.5	0	0.3	0.3	0.5	0.3
4. 教師の質問や課題に対して積極的 ~消極的である		0.8	-0.1	0.3	0.7	0.5	0.5	0.4	0	0	0.3	0.1	-0.3
5. 学習について級友と協力的 ~非協力的である		0.1	0.5	0.1	0.6	-0.3	-0.9	0.2	-0.2	-0.3	-0.7	0	-0.7
6. 学習について級友と著しく競争的 ~競争的でない		-0.3	0.2	0	0.4	0.3	-1.1	0.4	-0.8	-0.1	-0.7	0.2	-0.7
7. 学習の展開が発展的である ~停滞しがちである		-0.2	-0.5	0.1	0	0	0.1	0	-0.1	0.4	-0.5	0.7	-0.2
8. 明朗である ~暗い		0.5	0.5	0.8	1.2	-0.1	0.5	0	0.9	0.2	-0.1	0.7	-0.2

註. 1. 毎時間の観察記録の中から、5月と10月の各10回を抽出して得た平均値を示す。(＋2から－2までの5段階の評価による)  
2. \*は10月に向上、⊖は10月に低下、いずれも顕著なもののみ表示した。

表 3 普通・治療の組別に対する賛否 (実数)

賛 否	所属学級 調査時期	普通組 (赤・青)		治 療 組							
				白・青		白・黄		赤・黄		合 計	
		I	II	I	II	I	II	I	II	I	II
1. やりたい (すき)		25	26	3	3	14	15	2	1	19	19
2. やめたい (きらい)		6	2	1	0	0	0	3	2	4	2
3. どちらともいえない		3	4	0	1	0	4	0	0	0	5
合 計		34	32	4	4	14	19	5	3	23	26

註. 1. 時期のI、IIはそれぞれ7月調査と1月調査を示す。  
2. 学級で例えば白・青とあるのは国語と英語では治療学級に属するが、数学では普通学級に属するものをさす。

馬鹿にしたりねたんだりするから、(2名)とあるのは両学級間の緊張対立の存在を示唆するものとして注目される。

そこで両学級間の緊張対立の有無をたしかめるため、7月19日と1月11日の2回にわたって、過去3カ月間における級友とのけんかの回数及び理由を回想記入(無記名式)させるという仕方で行った。けんかの回数は7月と1月の間に特別大きな変化はみられない(表6)ので、7月について1人平均回数を比較してみると、普通学級0.9回に対

共 同 研 究

表 4 意 欲 の 程 度 (実数)

	程 度	所属学級		治 療 組									
		調査時期		普通組 (赤・青)		白・青		白・黄		赤・黄		合 計	
		I	II	I	II	I	II	I	II	I	II		
賛 成	1. だんぜんやりたい	3	1	1	0	3	3	0	0	4	3		
	2. やりたい	7	5	0	1	3	4	1	0	4	5		
	3. やった方がよい	15	18	1	2	6	6	1	1	8	9		
	4. どちらかといえばやってみたい	0	1	1	0	0	1	0	0	1	1		
	5. いやだがやってみたい	0	1	0	0	2	1	0	0	2	1		
反 対	1. だんぜんやめたい	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	2. やめたい	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0		
	3. やめた方がよい	2	0	0	0	0	0	2	1	2	1		
	4. できればやめたい	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	5. やってもよいがやめたい気がする	2	1	1	0	0	0	0	1	1	1		
中 立	(どちらともいえない)	3	4	0	1	0	4	0	0	0	5		
合 計		34	32	4	4	14	19	5	3	23	26		

表 5 賛否の理由 (2項目以上選ぶことを許す) (実数)

	理 由	所属学級		治 療 組									
		調査時期		普通組 (赤・青)		白・青		白・黄		赤・黄		合 計	
		I	II	I	II	I	II	I	II	I	II		
賛 成	1. 面白いから	1	4	0	0	1	2	0	0	1	2		
	2. 力がそろって勉強がしやすいから	9	16	1	0	4	2	0	0	5	2		
	3. 一生けんめい勉強するから力がつく	9	5	0	1	5	2	1	0	6	3		
	4. 互いに教えあうから実力があがる	5	7	0	1	0	1	0	0	0	2		
	5. 自分の力にあってよくわかる	6	5	2	3	7	11	1	1	11	15		
	6. その他	1	2	0	0	0	0	1	0	1	0		
反 対	1. 競争がはげしくて苦しいから	2	0	0	0	0	0	1	0	1	0		
	2. 家の人や近所の人がいっぱいから	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	3. 教室の備品をいためたり汚すから	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	4. 教室をかえるのにめんどうだから	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0		
	5. はずかしいから	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	6. 他の級の人がえらぶったり、馬鹿にしたり、ねたんだりするから	0	0	1	0	0	0	1	1	2	1		
	7. やりたいと思うが友だちに悪いから	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	8. その他	0	1	0	0	0	0	1	1	1	1		
中 立	1. 何も感じない	1	2	0	1	0	2	0	0	0	3		
	2. よいか悪いかわからない	2	2	0	0	0	2	0	0	0	2		
	3. その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
合 計		40	45	4	6	17	22	6	3	27	31		

Ⅱ 治療学級の指導について

表 6 けんかの回数 (実数)

所属学級 調査時期	普通組 (赤・青)		治療組							
			白・青		白・黄		赤・黄		合計	
	I	II	I	II	I	II	I	II	I	II
なし	11	14	1	2	1	4	1	1	3	7
1回	5	9	1	0	4	6	1	1	6	7
2~3回	6	6	1	1	3	4	2	0	6	5
4回以上	2	1	0	0	1	1	1	0	2	1
不明	8	4	1	1	3	4	0	1	4	6
合計	32	34	4	4	14	19	5	3	21	26

表 7 けんか原因 (実数)

所属学級 調査時期	普通組 (赤・青)		治療組							
			白・青		白・黄		赤・黄		合計	
	I	II	I	II	I	II	I	II	I	II
1. 自分のものをことわりなしに使用したから	7	5	2	1	4	3	2	1	8	10
② 勉強ができないといっているから	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0
3. 人のあだなをいうから	7	6	0	1	5	1	2	0	7	2
4. ミコ(エコヒイキ)だといわれるから、またいいられるから	1	1	0	0	1	0	0	0	1	0
5. おびやかされるから	6	1	0	0	0	0	1	1	1	1
⑥ 成績によってグループをつくるから	2	2	1	0	0	0	1	0	2	0
7. やたらに手をだすから	13	9	2	0	7	7	2	1	11	8
⑧ 勉強ができないといっている悪口をいうから	0	0	0	0	3	0	0	0	3	0
9. 弱いものいじめをするから	4	3	0	0	3	1	2	0	5	1
⑩ 勉強ができないといっている馬鹿にするから	2	1	1	0	1	1	1	0	3	1
11. その他	2	12	0	0	0	5	0	2	0	7
合計	45	40	6	2	24	18	12	5	42	25

註 ○印は組別に関する理由

し、治療学級1.1回でわずかに多い。しかしもともと治療学級に属する生徒の方がけんかをするが多かったのかもしれないので、組分け以前のものと比較しなければ正確なことはわからない。つぎにけんかの理由を表7でみると、両学級の組別に関する理由はいずれの調査でも全体の20%以下であり、対立は一般的にはあまり大きな問題とならないようである。しかし7月の調査で両学級を比較すると、普通学級では組別に関する理由が11.1%であるのに対して、治療学級では21.4%とかなり多くなっている。この点やはり指導上十分注意すべきところと思われる。

それでは逆にこの学習を通じて、級友間にどれ

程の親密さが生れたらどうか。6月22日のソーシオメトリック・テストによると、“最近仲よくなった、”とするものが固有の学級(ホーム・ルーム)で延5名、治療学級で延6名あり、仲が悪くなったとするものはホーム・ルーム・治療学級ともに延3名となっている。従ってこの組分けによって特に友人関係が悪化したとは言えず、むしろ新しい友好関係の発生という積極的側面を注視すべきであるように思われる。仲よしとなった理由に“一緒に勉強し教えあうようになった、”とするものが多いことも見逃し得ない。

(c) 学習への動機づけ —学級編成そのものに基因する学習意欲の向上は、前掲の表5によってその

一端をうかがい知ることができる。それでは新しく教科の学習内容に興味をもちはじめたものはどれほどあるだろうか。10月3日の調査によると、治療学級に入ってから教科の学習がすきになったものは、国語9名、数学2名、英語5名であって、きらいになったとするものは数学に1名あるだけであった。このうち治療対象と考えた6名については、延6名(1名で2教科以上すきになったものがある)のものが新しく教科学習に興味をもち始めている。

(d) 学習の効果 —それではこの治療学級における学習で生徒はどれ程の成果を収めたであろうか。標準学力検査の結果でみると、各教科に関する別の報告(2)によっても知られるように、成績の向上したものがかなり多くみられる。しかもその中には数名の特に著しく進歩したものが含まれている。治療対象である6名についてみると3教科全部にわたって進歩向上を示したものはないが、その中少なくとも1教科以上においていずれも多かれ少なかれ進歩向上している。

学習成果についての生徒自身の評価を、3月8日の感想によってみると、表8でみられるように治療学級の生徒の大部分がその積極的効果を認めている。この調査の時期は附属高等学校の入学試験の結果が発表され、治療学級の生徒のうち13名が不合格を知らされたあとであり、しかも公私立の高等学校の入学試験がまだ行われない前であったことを考え合わせると、この治療学級の学習成果に対する生徒の肯定的な態度はかなり強いものであるとみてよかろう。なお治療対象である6名

の生徒についてみると、不明とするもの1名のほかはすべて積極的効果を認めている。

### (3) 考 察

われわれは学業不振児の社会的、情緒的原因の除去に最適の治療集団の構造と機能を考え、それにもっともよく適合した治療学級を編成して、その指導に努めた。この治療学級に対する指導の結果を総合してみると、われわれがはじめに企図した集団の構造と機能にかなり近似したものが得られたように思われる。教師の観察した学級の雰囲気と生徒の報告による学級や学習への態度を結び合わせて考えるならば、この学級における学習が社会的安定性への要求や愛情への要求の不満を緩和あるいは解消させる機能をかなりの程度具備していたと判断することは、誤ではなからう。ここで普通学級との間に認められた軽度の対立緊張は、むしろ学習への意欲と治療学級内の友人との協力関係を促進する刺戟として、積極的効果をもたらしたと考えてもよいであろう。

特に注意したいことは、学業不振児の多くが治療学級の中で、学習について教えあいはげましあう学習仲間をみつけ出したことであり、教師のゆきとどいた指導とあいまって、学習への意欲を高めていったことである。学業不振児における客観的な標準学力検査などによる学力の向上が期待したほど十分に認められなかったとしても、社会的情緒的不適応が除去あるいは緩和されたとすれば治療学級の指導はその一半の責任を果たしたと考えてもよいであろう。

### 3. む す び

以上わたくしは治療学級の編成と指導を通してそれが学業不振児の社会的・情緒的原因の除去に対してどのような機能をもって働いているかを検討した。そして結局治療学級がそれについてかなり効果的であったと推論した。しかしこの推論は学業不振児の個々の事例について、今一度たしかめられなければならないであろう。個々の学業不

表 8 学習成果の反省 (実数)

	普通組			治療組		
	数	国	英	数	国	英
1 ひじょうにあった	1	2	2	5	5	5
2 あった	14	11	12	3	4	3
3 どちらかといえばあった	13	15	14	9	9	10
4 よいこともあるが、どちらかといえば害が多かった	3	3	3	1	1	1
5 全く効果がなかった	4	2	2	0	0	0
6 わからない	3	3	3	3	3	3
合 計	38	36	36	21	22	22

## Ⅱ 治療学級の指導について

振児が、それぞれに特有な社会的情緒的原因を治療学級の学習を通してどのようなしかたで除去していったかを明らかにすることによって、集団治療の機能が一層明瞭になり、この研究も全きものとなるわけである。しかしここで報告するだけの紙数の余裕がないので、それについては別の機会に改めて報告することとする。

- 註 1. 金原勇・中瀬中学校教官， 中学校における能力別学級編成について「児童心理」 V.11.， 昭和26， 71—88
2. 畑実， 国語科における学業不振児を指導して， 「名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要」第1集， 昭和30， 29—32  
新海寛， 数学科能力別指導における学級内の偏向分析， 「名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要」第1集， 昭和30， 33—34.